

満洲引揚者の戦争体験の語られ方
—黒川開拓団女性の英雄物語の構築を中心に—

The Ways of Narrating War Experience by Repatriates from Manchuria
with a Focus on the Construction of Heroic Narrative about Women from the
Kurokawa Settlement

劉 罡
LIU, Gang

摘要

After Japan's defeat in Manchuria in 1945, the male leaders of the Kurokawa settlement sent 15 unmarried women to a unit of the Soviet army in exchange for protection of the whole group of Japanese settlers. At that time the settlement's chiefs determined their task as "entertainment" (*settai* 接待) for Soviet soldiers. The women were prohibited to talk about their experience after the war. However, in 2013, one of the 15 women began making public statements about her sufferings. Later, the war experience of the 15 women from Kurokawa settlement gradually received public attention in Japanese society. Especially in 2018, the local society praised these 15 unmarried women as heroes of the settler group for the first time and built a memorial monument for them. This article discusses the narrative of war experience of Kurokawa female settlers. In particular, it explored how the experience became a heroic narrative in the local society. The article consists of three sections. The first section introduced the history of the Kurokawa settlement and summarized the shortcomings of the previous studies. The second section explored the mechanism of how the women's experience became a heroic narrative through the analysis of the monument. Finally, the third section quoted some testimonies of another woman from the same group to show the exceptional nature of this mechanism.

キーワード：引揚者 戦争体験 英雄物語 黒川開拓団 満洲

Keywords: Repatriates War experience Heroic narrative Kurokawa settler group Manchuria

1. はじめに

2013年11月9日、満蒙開拓団平和記念館の「語り部講演会」で、元岐阜県黒川開拓団の安江善子という女性は満洲地域からの引揚体験について語り、「開拓団の命を救うために娘たち

は皆泣きながら、将校のお相手をしなければいけない」¹と証言し、性暴力を受けたことを訴えた。当時開拓団では、ソ連軍を相手にすることは「接待」という言葉で表現されていた。安江の証言は、日本社会に衝撃を与え、メディアや研究者の間で多くの関心を集めることになった。なぜならば、これまでの引揚女性が受けた性暴力の証言というのは第三者によるものであり、当事者の、ましてや実名を公表しての、証言はなかったためである。また、2017年8月5日にNHKで放送されたETV特集「告白-満蒙開拓団の女たち」の中で、安江以外の当事者も「接待」に関する証言を行い、黒川開拓団女性のことがようやく全国に知れ渡ることになった。さらに、2018年11月18日に黒川分村遺族会による「乙女の碑」の碑文の除幕式が行われたことによって、黒川開拓団女性は再び日本社会の関心を集めることになった。除幕式では、戦後生まれの会長をはじめとした遺族会による、当事者女性への英雄顕彰が行われたのである。一方、黒川開拓団の戦争体験をめぐってメディア空間では、当事者女性が「性の相手」や「性接待」、「性暴力被害者」、「sexual entertainment」などの言葉で報道されている²。そして当事者女性が「被害者」とされたのと同時に、「加害者」の同定が行われ、当時帝国日本の開拓団移民の政策も議論の対象となった。当事者女性は帰国後、開拓団内部で差別されていた。単にソ連軍だけが「加害者」であったのではなく、共同体内部の人も「内なる加害者」や「第二の加害者」として同定されている³。もちろん、当事者女性が受けた性暴力被害という事実を否認するつもりはない。しかしながら、上野千鶴子(2018)は、20世紀後半の性暴力をめぐるフェミニズムの達成について、性暴力による被害を性暴力被害と定義できるのは他人ではなく当事者女性のみであるという考え方が出て来たと述べている⁴。即ち、当事者女性のみが被害という状況を判断することができるということである。それゆえ、本稿では、当事者女性の戦争体験を普遍的な「性暴力被害の体験」としては捉えず、彼女らを普遍的な「戦時性暴力被害者」ともしない。「性暴力被害」という言葉を選び論を展開するならば、その言葉の背後にあるロジックや権力関係を承認することになると思われるためである。また周知のように、国家-地域社会-個人といった三つのレベルにおいては必ずしも同じ語られ方が共有されているわけではない。即ち、レベルごとに語られ方の位相差は存在しているのである。現在広く流布している「黒川開拓団女性は性暴力被害者である」という語られ方は、あくまでも日本社会における一つの通念であり、広く世論を喚起するための一つのアプローチでもある。しかし、前述した除幕式で「乙女の碑」に碑文が刻まれたという事実は、当事者女性を顕彰し地域社会の英雄として祀ることだと思われる。つまり、メディア空間での「性暴力被害者」という言葉は地域社会では必ずしも通用するとは限らないのである。

本稿は、このような問題意識から出発し、慰霊というコメモレイション、特に2018年の黒川分村遺族会による英雄顕彰の分析をとおして、黒川開拓団女性の戦争体験が、何故、どのように地域社会のなかで英雄物語として言語化されてきたのかを解明するものである。そのためにまず、黒川開拓団の歴史と慰霊碑の建立史を概観したうえで、先行研究を再検討する。そして、

従来の地域社会の戦争体験の語られ方を踏まえたうえで、当事者女性および関係者の証言などの資料を用いて分析し、黒川開拓団女性の英雄物語がどのように構築されたのかを明らかにする。最後に、構築された英雄物語に対抗する個人の語りに焦点を当て、地域社会の英雄物語の背後にある規定性を論じる。誰が、いつ、どのような社会的文脈で、誰に向けて、どちら側の言葉で語るのか。また、語られないことはどのようなことなのか。このような点に着目し語りを分析することで、戦争体験の語られ方の位相差を明らかにし、語りの多様性と多層性の確認ができると考えられる。

なお本稿では、「英雄」とは、戦争で国・開拓団等のために能動的に自らすすんで命を捧げた人々のことを指し、「英霊」(fallen soldier)、「犠牲者」(victimではなく、the hero sacrificed)と呼ばれる人々も含めて「英雄」と定義する。そして「英雄物語」とは、彼ら・彼女らの戦死を「英霊」、「犠牲」とする語りであるとして定義づける。

2. 黒川開拓団の歴史と先行研究の再検討

2. 1. 黒川開拓団の歴史⁵

満洲への農業移民は1932年に始まり、1936年には広田内閣の下で七大国策の一つに挙げられるものとなっていた。当時、多くの開拓団民は満洲移民政策の下で渡満した。渡満後、開拓団民は関東軍の保護下で暮らしていたが、中国大陸戦線と太平洋戦線が激戦となり、多くの関東軍や成年男子団員が根こそぎ徴兵されることになった。敗戦後、多くの開拓団民は逃避行や収容生活といった辛い経験をしている。黒川開拓団もそうした体験を持った一団である。

1941年4月、岐阜県加茂郡黒川村（現在白川町）の黒川開拓団はまず29名の団員を満洲に派遣し、翌年1942年4月から毎年3回にわたって計129世帯、661名の団員を吉林省・陶頼昭^{とうらいしょう}の鉄道駅から西一帯へと入植させている。この場所は、満洲の新京（現在長春）とハルビンの中間地点である（岐阜開拓自興会1977：335）。成年男性は根こそぎ徴兵されたため、残りの団員は老人、女性、子どもであった。敗戦後、支配民族から転落した開拓団民たちは襲撃を受けるようになった。男性団幹部は現地住民の襲撃から身を守るために、陶頼昭駅付近に駐在していたソ連兵に助けを求めた。その際に、団幹部は15人の未婚女性団員を「接待」のためにソ連兵に差し出したのである。開拓団の中では1946年10月から約2ヶ月間、「接待所」や医療室などが設置された。その後、この15人のうち4人は性病や発疹チフスなどにかかり、現地において死亡している。また、661人のうち200人余りの団員も満洲で命を落としている。残りの451人は無事に故郷に送還された。1960年に現地で亡くなった仲間を追悼するため、地元の佐久良太神社境内に「招魂碑」が建てられ、1965年には黒川出身の陸海軍兵士を顕彰するために「招魂碑」の前に「慰霊碑」も建てられた。また開拓団内では、長い間ソ連軍へ女性を差し出していたという話はタブーとされた。

1980年代以降、残留孤児の訪日調査や、肉親訪問などの開拓団における訪中が盛んに行われていた。黒川分村遺族会員の一部は1981年に白川町友好訪中団に参加し、その後「招魂碑」の隣に「訪中墓参記念」という記念碑と、現地で亡くなった4人の女性団員を悼むための「乙女の碑」という無碑文の慰霊碑（地蔵尊）を建立した。ただし、当時慰霊碑の建立に難色を示した当事者および関係者もいたので、慰霊碑の説明や建立の経緯などは「乙女の碑」には一切明記されなかった。即ち、ごく一部の関係者のみがこの慰霊碑の存在を知っていたということである。1991年、遺族会の第二回訪中を記念するために「招魂碑」の隣に新たな記念碑が建てられた。2012年、戦後生まれである藤井宏之⁶が遺族会会長となり、黒川開拓団の歴史を次世代に伝えるという明確な意思を示して活動を開始した。猪股祐介（2018）によると、2013年11月9日の講演当日に彼は、関係者を満蒙開拓平和記念館に招待し、「接待」に出された女性に「証言」を依頼したという⁷。このような公の場において、当事者女性が「接待」について語ったのははじめてのことだとされている。2018年4月、藤井会長は「乙女の碑文を作る」と提言し、その後関係者や家族らに確認したうえで碑文作成の準備を進めたという。同年11月18日に佐久良太神社で、遺族会員やその関係者、報道記者らが「乙女の碑」の前に集まり、碑文の除幕式が執り行われた⁸。

2. 2. 先行研究の再検討

満洲引揚研究の研究史を概観すれば、引揚研究は主に歴史学や文学、社会学などの分野で展開されている。特に開拓団を生み出した政治経済史的構造については歴史学の研究蓄積がある。また開拓団当事者にとっての経験については、「残留孤児」と呼ばれた中国帰国者たちの帰国前後から、社会学等で聞き取り調査が行われてきている。特に開拓団の被害について、当時の帝国日本の国策、関東軍の責任、ソ連軍と現地住民らの襲撃、開拓団内部の加害などのいくつかのファクターがあげられているが、開拓団をめぐる歴史認識の対立—移民史 vs 侵略史—はいまだに和解に至っていない。

また近年、日本内外のフェミニズムの高まりと性暴力被害のパラダイム・シフトなどの変化により、これまで抑圧されていた性暴力の語りが表面化されるようになった⁹。日本内外のアカデミズムにおいても「引揚女性と戦時性暴力」への関心は高まっている。帰国途中で女性が受けた性暴力経験に関する研究にはじめて取り組んだのは、古久保さくら（1999）である。彼女は引揚女性の手記を対象に、敗戦後に満洲でソ連軍以外に日本人男性にもレイプされた女性を「被害者」とし、「日本国民」「元満洲開拓団員」「まともな女」いった三つの共同性により、「被害者」の語りが制御されてしまうと論じている¹⁰。また性暴力経験に関する手記の書き手のジェンダーに焦点をあて、Mariko Tamanai(2008:74-77) はレイプされた女性のイメージを単なる無力な存在でなく、強姦に必死に抵抗した能動的な女性像として提出した¹¹。黒川開拓団女性団員の戦争体験の主な先行研究には、猪股祐介と松田澄子の研究がある。猪股（2018）は当

事者女性を「性暴力被害者」としたうえで、黒川開拓団女性への聞き取りや歴史資料、特に 80 年代出版された遺族会内部の回想録などを中心に開拓団女性の戦争体験の語られ方がどのように地域社会に浮上してきたかを論じている¹²。松田（2018）は、団幹部と未婚女性との間には家父長制による「命令」と「服従」という上下関係があったと述べ、黒川開拓団女性が受けた性暴力を「性の接待」と表現し、彼女らの経験を「性暴力被害」としている¹³。以上の先行研究に対しては、当事者女性および彼女らの戦争体験が「性暴力被害者」や「性の接待」に一元化されがちであることが指摘できる。言い換えれば、当事者女性の戦争体験が研究者らによって、「性暴力被害」というあまりにも正しすぎるようにみえてしまう用語で代弁されてしまう傾向が見られるのである。先述のように、彼女らの経験が「性暴力被害」であるかどうかを判断するのは当事者にしかできないことだ。つまり、性暴力を強いられたとき、当事者女性は単なる無力かつ従順な「被害者」であったというよりも、むしろソ連兵や男性団幹部とのやりとりをして、生存戦略を駆使し、能動的に知恵を生み出す「人間」であったと思われる。黒川開拓団の 15 名の女性団員たちの戦争体験が「性の接待」「性暴力被害者」という用語で代弁され続けるのであれば、メディア空間において普遍的に性暴力被害像が再生産され、肥大化していくのではないかと危惧される。そして場合によっては、当事者女性自身による戦争体験の語られ方が捨象、軽視される可能性もあると思われる。さらに、彼女らの戦争体験が一部の右翼勢力に排外主義、反韓反中の材料として濫用される懸念もある¹⁴。

本研究は、以上の先行研究を踏まえて、発話者は誰か、発話の社会的文脈はどのようなものかなどの問題意識を持ち、外部から規定されている言葉—「性暴力被害者」や「性接待」など—の使用に留意しつつ、2018 年以降の「乙女の碑」というコメモレイションを中心に、特に碑文分析をとおして当事者女性の戦争体験がどのように地域社会の英雄物語へと「昇格」していったのかを究明する。換言すれば、当事者自身および関係者の証言とその証言を生み出す文脈をとおして、これまで流布してきた「性暴力被害者」像以外の語られ方を提示していきたい。

3. 地域社会における黒川開拓団女性の戦争体験の語られ方

2018 年 11 月 18 日、無碑文の「乙女の碑」の隣に新たな説明を加えたことは、黒川開拓団女性の戦争体験を公式的なものとし、地域で共有すべき記憶としようとする行為であると考えられる。これは単なる死者への追悼だけではなく、「開拓団のために犠牲となった」死者を崇拝し、神聖視するような英雄物語の構築でもある。本節では、地域社会における戦争体験の語られ方を概観したうえで、「乙女の碑」の碑文分析を行い、開拓団女性の戦争体験がどのように地域社会の英雄物語とされていったのかを考察する。

3. 1. 地域社会における戦争の語られ方

先述のように、戦後に黒川開拓団は故郷の岐阜県加茂郡黒川村（1956年に白川町と合併した、現在の白川町の南東部にあった村。以下は現在の地名、白川町とする）に引揚げてきた。戦後地元の佐久良太神社境内に、戦争関係の慰霊碑や記念碑－①「招魂碑」（1960）、②「慰霊碑」（1965）、③「訪中墓参記念」（1982）、④無碑文の「乙女の碑」（1982）、⑤「第二回訪中記念碑」（1991）、⑥「乙女の碑」の説明板（2018）－が続々と建立された。もちろん、神社境内に慰霊碑が建立されるようになったのは戦後からではない。日清戦争と日露戦争で亡くなった地元出身の男性兵士の⑦無名慰霊塔はそれ以前から存在していた。この慰霊塔は1917年3月に完工し、表には当時の陸軍中将大島健一による「表忠」という題字が刻印されている。つまり佐久良太神社境内は地元の戦争関連の慰霊碑群の所在地といえるのである（写真1）。モッセ（1991＝2002）は、近代国民国家はその登場して以来、無名兵士の戦死に能動的な意味を与え戦争を神聖な出来事として正当化してきたと指摘している¹⁵。具体的にいうとモッセの議論では主に戦



（写真1 筆者撮影 2019年5月3日 佐久良太神社境内にて）

死した男性兵士の国のために命を捧げた能動的な行為が英雄とみなされ、軍人の国立墓地や各種のモニュメント、記念碑などをとおして、国家は戦死の意味と解釈を把握し、継承しようとするのである。ここから窺われるように、全ての戦争による死を英雄物語にできるわけではなく、英雄物語とされる過程には、死をめぐる序列化が存在する。具体的には、死んだのは兵士か民間人か、男性か女性かなどの選別基準が規定されていると考えられる。以上の慰霊碑は、兵士向け（②⑦）と民間人向け（開拓団関係：①③④⑤⑥）の二つに分けられる。⑦は無名慰霊塔であるが、②には戦死兵士の名前が記録されて、裏には「(前略) 殉国の英霊、陸海軍人軍

属百七十余●●●に、一碑を建立し、墓のみ名を留めて、英魂を慰めると共に、遺芳と後昆に伝え、永久に平和ならんことを祈念する」と記されている（傍点、句読点は引用者による）。「殉国の英霊」、「英魂」などの言葉からは、兵士たちが国家のために戦い、死んだ能動的な英雄と表象されていることが窺える。そして兵士一人ひとりの名前が明記されたことから、彼らが地域社会の英雄としても祀られていると考えられる。英雄物語は自国の男性兵士を中心に構築されており、それに対し開拓団関係の慰霊碑の碑文では（①⑤）、開拓団民の死は男性兵士の死のように能動的に捉えられることはなかった。次に黒川分村遺族会が建立した1960年①と1991年⑤の碑文をみってみる。

①（前略）昭和二十年八月終戦の悲運に遭い、万里異邦に在り、絶望混乱の渦中に忍従するも暴徒の凶刃に傷つき悪疫に殞れる者は二百余柱。まことに痛哭の極みなり（後略）。

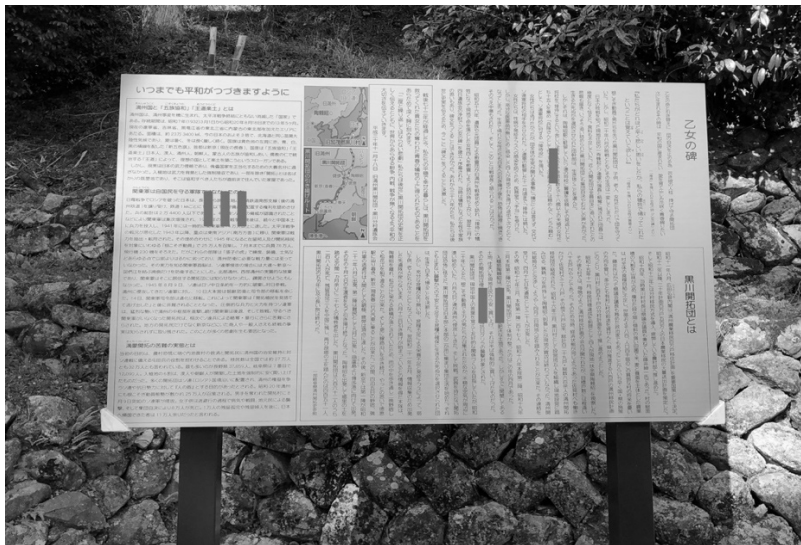
⑤（前略）幾多の辛苦と困難を乗り越え開拓の成果今一步のとき終戦の悲運に遭い、一朝にしてすべてを失い、言語に絶する苦しみと、絶望混乱の内に二百余名の同胞の亡骸を大陸の土に埋め、生ける者のみ無一物の引揚げを余儀なくされた（後略）。（傍点は引用者による）

以上の碑文から、開拓団の歴史が逃避行の際に受けた被害の語り（以下受難物語）として規定されていることがわかる。碑文からは、国のために戦死した男性兵士像とは異なる、敗戦によって異国において命を落とした悲慘な開拓団民像が読み取れる。これまでの満洲開拓団の逃避行という受難物語では、常に「被害者」(victim)、「加害者」(perpetrator)、「関与者」(participant)というアクターが介入している。開拓団員の「被害者性」を突き詰めれば突き詰めるほど、「加害者」や「関与者」の存在が浮上するのは当然である。それゆえ、日本社会においては満洲開拓団の満洲での体験が「帝国主義への加担の歴史」と「帝国主義による悲劇の歴史」とに二分されている傾向が少なくない。一方、英雄物語の文脈においては、「被害者」「加害者」「関与者」という三者の関係よりも、戦死者を「英霊」(fallen soldier)、もしくは「犠牲者」(the hero sacrificed)としていかに顕彰するかが重要視されていると考えられる。佐久良太神社境内という同じ地理空間には地元兵士のものと開拓団員のものという二つの戦争体験の語られ方が併存している。英雄として祀られるのは男子兵士に限られており、同じように敗戦で命を落とした開拓団民は英雄として祀られることはない。開拓団民は地域社会で英雄を名乗る資格を付与されなかったのである。これこそが死をめぐる序列化といえる。確かに④無碑文の「乙女の碑」の建立は当事者女性を英雄視するという意味を持つが、これはあくまでも一部の関係者内部でのみ共有できる解釈であり、地域社会では不可視化されたままであった。地域社会ではじめてこの序列化を攪乱したのは、黒川開拓団女性による名乗りである。先述のように2013年に当事者女性が、

公の場でソ連軍から性暴力を受けたことに関して、性暴力被害ではなく、「開拓団のために」行った行為であると繰り返したと述べたのである。この語りからは、男性兵士と同じく滅私奉公に努めた自分も英雄だという含意があると考えられる。このような語りに応じて、2018 年黒川分村遺族会によって⑥「乙女の碑」の説明が加えられ、地域社会で公式に開拓団女性の犠牲は能動的な死と認められたようになったのである。次節では、⑥の碑文分析をとおして、開拓団女性の戦争体験がどのように地域社会の英雄物語にされたのかを考察する。

3. 2. 「乙女の碑」の碑文にみる英雄物語

⑥「乙女の碑」の説明の碑文（写真 2）は約 4 千字が刻まれており、I「乙女の碑」、II「黒川開拓団とは」、III「いつまでも平和がつづきますように」と、三つの部分に分けられる。I は当事者女性の戦争体験、II は黒川開拓団の入植史、III は「満洲国」の歴史、関東軍の責任と満蒙開拓団の苦難についてである。II と III の部分は、現在日本社会で広く流布している、開拓団の受難物語とほぼ合致したものである。以下では I を中心に開拓団女性の戦争体験がどのように地域社会において英雄物語とされたのかを分析する。



（写真 2 筆者撮影 2019 年 5 月 3 日 佐久良太神社境内にて ）

満洲開拓団の慰霊碑の碑文については、坂部（2007）は、長野県の開拓団の慰霊碑を中心に分析し、碑文内容は満洲入植に至る経緯、敗戦後逃避行の悲惨さ、死者への追悼と平和への祈念という三つのパートからなっていると述べている¹⁶。⑥も似たような構成をしている。ただし、I の碑文内容は 1000 字以上あり、これまで論じられてきた満蒙開拓団の慰霊碑の碑文の内容よりも詳細に書かれている。I の碑文も以下のように三つのパートによって構成されている。第一のパートは当事者女性の言葉と証言である。第二のパートは戦争体験の実態、なぜ、どの

ように、誰が誰を、誰に差し出したのかといった内容である。第三のパートは、英雄顕彰や平和への祈念という部分である。まず、第一のパートをみってみる。

乙女の命と引き替えに 団の自決を止める為 若き娘の人柱 捧げて守る開拓団
次に生まれるその時は 平和の国に産まれたい 愛を育て慈しみ花咲く青春綴りたい
（「接待」を強いられた女性の詩「乙女の碑」より）

『私たちがどれほど辛く悲しい思いをしたか、私たちの犠牲で帰ってこれたということは覚えていて欲しい』

（「接待」を強いられた女性の言葉より）（傍点は引用者による）

これまでの慰霊碑の内容と最も異なる点は、当事者自身の言葉から始まるということである。1980年代の回想録や記念誌の中での男性の語り手による「犠牲」や「挺身」などの言葉の使用は、当事者女性の能動性が代弁されたことになり、ソ連軍へ「接待」を出した男性団幹部の責任を不可視化していた¹⁷。この碑文も「英雄物語」の構築に同様の役割が果たしていると考えられる。例えば、「団の自決を止める為」、「捧げて守る」、「私たちの犠牲」という言葉からは、滅私奉公の女性像も読み取れる。ただし今回の「英雄物語」では、女性の能動性は語り手の男性幹部によって装われたものではなく、自分自身の詩や証言によるものである。当事者女性は、開拓団を守るため、自ら進んで身を捧げる道を選んだのだという姿勢を表しているようである。実は碑文にある詩の作者は2013年講演会で自ら戦争体験を語り出した安江善子である。彼女はこの詩を「乙女の曲」と名付け、1990年に「乙女の会」という当事者女性の集いで発表した。川恵実や平井美帆のルポルタージュ、そしてと松田澄子と村瀬桃子の共同研究では、それぞれ聞き取り調査を行い、「乙女の曲」を引用しているが、それぞれの内容には相違が見られる。

（前略）

隣の村の ウジャジャンは 全員自決で 散り果てぬ
明日は我が身の 消える日が 両手合わせて 死ぬを待つ
ああ忘れぬ あの時の 思い出語る 乙女会
尊きいのち 捧たる あの娘の悲しみ 誰が知る（後略）（川）¹⁸

（前略）

隣の村のウジャジャンは全員自決で散り果てぬ
あしたは我が身の消える日か 両手合わせて死ぬを待つ
乙女の命と引替えに 村の安全を守るため 若き娘の人柱捧げて生きる開拓団
ああ忘れぬ あの時の思い出語る乙女達

尊き命捧げたるあの子の悲しみ誰が知る（後略）（松田・村瀬）¹⁹

乙女の命と引き替えに 団の自決を止める為

若き娘の人柱 捧げて守る開拓団（平井）²⁰（下線部は引用者による）

以上の引用から、現在「乙女の碑」の碑文は平井が手に入れた資料と同じバージョンであることがわかる。平井によると、この詩は縦書きで打ち出されて、手書きされている箇所も数カ所あることがわかっている。これは作者自身による書き加えや書き直しがあったためとされている。少なくとも1990年から2018年までの間に、下線部についての書き加えと書き直しがあった。1990年の初出にはこの文はなく、「村の安全を守る」という表現を使用することによって、当事者女性が能動性を獲得したのだと思われる。さらに「村の安全を守る」から「団の自決を止める」へと書き直しされることによって、開拓団の生存状況の深刻さが大幅に増幅された。「自決を止める」は、女性の能動性をさらに強調し、女性の戦争体験を「開拓団の英雄」として意義づけるものであったと考えられる。つまり、以上の書き加えによって、当事者女性が「乙女たちは開拓団の英雄だ」と強く主張したいという気持ちが表現されているのである。ただし、確かに（一部の）当事者女性は、書く、語る、書き直すなどの実践行為によって、自らの主体性を取り戻し、自分の戦争体験を言語化できたように見えるが、新聞報道や「乙女の碑」の碑文に関しては、当事者女性は書く主体ではない。あくまでも女性の言葉が部分的に選択されることによって「女性が語っている」というような幻想が記事、碑文をとおして読み取られているだけなのである。女性が語った、書いた内容を選択的に切り取り、碑文の内容を記録、管理するのは実際には黒川分村遺族会である。例えば、「乙女の曲」の中では、「思えば他国のその土地に 侵略したる 日本人/ 王道国土の 夢を見て 過ごした日々が 恥ずかしい」²¹という部分があるが、「侵略」や「恥ずかしい」という言葉は地域社会の英雄物語の構築にとって不協和音であり、たとえ当事者女性の証言であっても、碑文には記録されなかった。除幕式当日、藤井会長は挨拶の際に碑文について、「（前略）この碑文はステンレスできており取り替えることも出来るため、今後も社会に即した表現方法等で更にステップアップした碑文になっていく可能性もあります（後略）」²²と述べている。「乙女の碑」の碑文は、語る女性と書く遺族会の両者によって作成されたものといえるが、両者の力関係の不均衡によって、女性が語った内容は常に管理、選別されたうえで部分的に採用され、時には人為的に修正されることもある。言い換えれば、女性による証言が生まれる文脈の非対称な権力性は確かに存在しているのである。次に第二のパートの内容を分析しながら、黒川分村遺族会によって開拓団女性の戦争体験がどのように表現されたのかを考察していく。

根こそぎ動員で男たちを失った黒川開拓団は、子供、老人、女性たちだけで団を守って

いた。しかし、昭和二十年八月の敗戦とともにその生活は一変してしまった。

日本の敗戦を知った現地住民の一斉蜂起とソ連軍の強姦と略奪に残された団員らは、幾度となく怯えた。食料も不足していた。近くの開拓団は全員自決に追い込まれたとの悲報も届き、いっそう追い詰められた黒川開拓にも集団自決やむなしの声があがった。生きるか死ぬかを選択させられた団幹部は、生き抜くことを選んだ。

しかしそれは、陶頼昭駅に駐留していたソ連の将校に警護を依頼しその見返りとして将校を「接待」するという苦しい決断であった。幹部は数えで十八歳以上の未婚の女性たち十五人を集め「兵隊さんとして行っている人の奥さん方に頼めんで、どうか頼む」として、ソ連軍将校に対する「接待役」を強いた。(傍点は引用者による)

以上の内容からはいくつかのことが窺える。第一に、一般に流布する開拓団の逃避行の受難物語とほぼ同様に、敗戦後現地住民とソ連軍からの襲撃が始まったということである。ただし、一般的な逃避行の中で常套句のように繰り返された悲劇よりも深刻に描かれるのは、黒川開拓団が直面した集団自決であった。近くにあった熊本県来民開拓団が集団自決をさせられたことから、当時黒川開拓団が置かれた状況の残酷さは際立つ。開拓団員の生死に関わる緊迫性を強調することによって、団幹部による「苦しい決断」の仕方無さを受け入れやすくさせていると考えられる。第二に、団幹部による要請が明記されていることである。1980年代の回想録や記念誌では団幹部の関与の叙述はなかったが、今回の碑文では「団幹部は…(中略)…ソ連将軍に対する「接待役」を強いた」との明記されている。しかし「接待役」を強いたことは団幹部にとって「苦しい決断」であり、そもそも団幹部の本意ではなく、集団自決とソ連軍との取引という二者択一を迫られた時の、多数の団員の生存が優先されたやむを得ない判断だった、という遺族会側の解釈のしかたが窺える。もしもソ連軍や現地住民からの襲撃が無ければ、団幹部による女性の要請はなかったのではないかというニュアンスが含まれているようにも思われる。第三に、「接待」や「接待役」という男性団幹部側の言葉で、当事者女性の戦争体験が表現されていることである。このことから碑文を書く主体は当事者女性でなく、黒川分村遺族会であることが証明される。先述したように、言葉の選択は権力関係による結果である。「接待」というのは本来来客をもてなすという能動的な意味がある。しかも「接待」という言葉そのものからは、直接ソ連軍からの性暴力を連想させることはできない。碑文の第二のパートからは、団幹部は性暴力の関与を間接的に認めてはいるが、加害の経緯の記録を最低限にしていることが読み取れる。もちろん、この加害は状況付きで、止むを得ない「苦しい決断」であったのである。

最後に、碑文の第三のパートを見てみよう。これはそれまでの慰霊碑の碑文（例えば前文の①⑤）とは異なり、当事者女性に感謝したうえで、彼女らを開拓団の英雄として表す内容である。引用は以下のとおりである。

（中略）

戦後七十三年が経過した今、私たちの平穏で幸せな暮らしは、黒川開拓団を救ってくれた貴女たちの奪われた青春の犠牲の上に得られたものであることをあらためて深く胸に刻みます。「二度と繰り返してはならない悲劇」私たちは後世に黒川開拓団の史実を正しく伝えるときとも、世界からあらゆる紛争、内戦、戦争が無くなるよう平和の大切さを伝えていきます。（傍点は引用者による）

第三のパートでは、黒川開拓団の戦後の平和は当事者女性の犠牲の上に成り立っていることが記述されている。さらに詳しくいうのであれば、祀られる対象はソ連軍の性暴力によって純潔を失わされた女性ではなく、開拓団を救うために純潔さえも惜しまなかった女性であると思われる。モッセがいうように、「慰藉の機能は、個人的レベルにも公的レベルにも等しく作用した。だが記念されるのは、戦争の恐怖ではなく栄光であり、悲劇でなく意義である」²³のである。地域社会において「乙女の碑」は性暴力被害を記念するための慰霊碑ではなく、男開拓団の自決を止めた英雄を、男性兵士に対するように顕彰するためである。これまで公の場で抑圧され、関係者内部でのみ共有されていた当事者女性の戦争体験は、黒川分村遺族会と当事者女性による碑文作成をとおしてはじめて地域社会で「公明正大」に記憶されにいく英雄物語となった。先述のように、英雄物語の構築は、語り手の当事者女性と聞き手（書き手）の遺族会との相互作業によって成り立っている。英雄物語は、ソ連軍に女性を差し出したという行為に対する団幹部の罪悪感を希釈したと同時に、当事者女性に戦争体験（開拓団のため）の語りの正統性を与えたと考えられる。しかし、当事者女性全員が自分の戦争体験を英雄物語として解釈するわけではない。次に英雄物語に抵抗するもう一人の当事者女性の語りをみていく。

4. 英雄物語に抗して

戦争世代の高齢化とともに、黒川開拓団の当事者女性の多くも他界した。語り手の安江善子が2016年に亡くなった後は、存命の当事者女性は二人となっている。その中で一人は実名を公表し、公の場で戦争体験を語ったり、「乙女の碑」の碑文の除幕式にも参加したりし、その証言は碑文にも載せられている。「私らの犠牲で帰ってこれたということは覚えていて欲しい」という証言からは、自分の戦争体験を英雄物語としたい彼女の願望が見える。しかしその一方で、自分の戦争体験を英雄物語化せずに、理不尽さと無力さを強調する女性もいる。彼女は帰国後間もなく地元を離れ、その後一度も地元には戻っていない。即ち、彼女は黒川開拓団によって構成されている地域社会の外の人間になることを選んだともいえるのである。彼女は今でも匿名のままでインタビューを受けている。次のインタビューの中で、彼女はこう語っている。

悪いなーって、悪いけど出てくれって。何が出てくれだと思うけど。(中略) 何しろ、私たちは下々だから、上のことはわからないし、どういうふうに決まってきたのかもわからないから。『接待』というときは、わたし、酒……ウオッカとかお酌しろと言われてきたから、ああそうなのかな、くらいに思っていたから。なんで鉄砲の先で小突かれて横にならなきゃいけないの？なんて思っていた。それから、みんなしくしく泣き出した。私の年代、みんなそうで。²⁴ (傍点は引用者による)

前述の自ら進んで「団の自決を止める」という英雄物語とは異なり、以上の内容からは「わたしは上の人に頼まれて「接待」に出た。しかも女性選別の基準はよくわからない。そして「接待」の内容はお酒のお酌と教えられたのに、実際に行くと、鉄砲の先で小突かれて性暴力を受けてしまった」というもう一つの戦争体験の語りが窺える。そして匿名の理由を彼女は次のように述べている。

自分が今までこう、いばってきたというんか、お母さんとして生きてきた分、その部分にふれられたくない、恥ずかしい。恥ずかしいですよ。子どもに対したって。恥ずかしいよりも子どもは、きつとね、汚いと思うよ。²⁵

地域社会で実名を公表した女性が自ら自分の戦争体験を滅私奉公の英雄物語として紡いでいる一方で、彼女は自分の戦争体験を受難物語として解釈しているようである。黒川開拓団女性の戦争体験の語りは決して一様ではない。異なる社会的文脈（地域社会内部、地域社会外部）によって、語る女性と語らない女性の間に境界線が引かれている。

5. 結びにかえて

本稿では、黒川開拓団女性の戦争体験の語られ方を取り上げ、これまで抑圧されていた語られ方が、いかに英雄物語というかたちで地域社会に浮上していったかを明らかにした。この英雄物語は、戦争についての地域社会の集合的記憶の延長線上に置かれ、語り手の女性と聞き手（書き手）の黒川分村遺族会の相互作用によって、「接待」という男性幹部の言葉のもとに作られたものである。英雄物語においては、当事者女性は語りの正統性を獲得できると同時に、団幹部の加害責任への追及も不問に付されるようになる。もちろん、すべての当事者が英雄物語のロジックに乗っかって語るわけではない。男性幹部側の言葉を採用することに慎重になり、共同体外部のもう一人の当事者の語りを分析することによって、英雄物語が持つ限界が見えてくる。黒川開拓団女性の戦争体験は、単純に普遍的な戦時性暴力被害には還元できないと同時

に、感動的な地域社会の英雄物語にも還元できないのだと結論づけたい。

これまで見てきた新聞記事や碑文内容、当事者女性の言葉、遺族会側の言葉からわかるのは、戦争体験を語る言葉の採用には差異が存在するにもかかわらず、共通しているのは「乙女」という言葉の使われ方である。能動的に開拓団を守ったとするのか、あるいは受動的に男性団員によって差し出されたとするのかを問わず、ソ連軍を相手したのは「乙女」たちのみだったと規定されている。「乙女」という言葉はある種の記号として普遍性を持っているようであり、再生産され、消費されている。しかし、彼女らがソ連軍の相手をさせられる前には、関東軍が連れてきた「従軍慰安婦」がまずソ連軍の相手をさせられていたという。一人の男性団員の手記には以下のように書き綴られている。

陶頼昭に駐留ソ連の輸送司令官が安江団長を先に招待した。まだソ連と少し交際をもっていない時期だ。それは大変な事に団の娘達を同道してこいと言ふ事だった。娘達は何んで進んで同道する娘があるだろうか。この時終戦十五日に陶頼昭に停車した乗客が団に大勢来ていた。その中に軍の慰安婦が七八人いた。その中から行ってくれる事になった。この人達が団の娘達を良く取り計ふから一所に行つて呉れる事になった。この招待は何事もなく終わった。²⁶（傍点は引用者による）

「開拓団のために犠牲となった女性を顕彰する」という理由で慰霊碑を建立し、碑文を刻んだのであれば、「従軍慰安婦」も顕彰の対象となるはずである。しかし、現在でも上記の「従軍慰安婦」の存在は黒川開拓団、地域社会、日本社会において注目されていない。メディアにおいて広く流布している「性の接待」、「性暴力被害者」であれ、地域社会における英雄物語の構築で使用されている「接待」、「挺身」であれ、これらの言葉による規定範囲は黒川開拓団出身の15名の「乙女」のみとされている。前述した「従軍慰安婦」の語られ方はその範囲以外にある。換言すれば「従軍慰安婦」の戦争体験を言語化する社会的文脈は未だ作られていないのである。今後は、本稿において明らかにした地域社会の英雄物語の規定性を踏まえ、「乙女」の戦争体験と照らし合わせた「従軍慰安婦」の存在をとおして、「開拓団のために犠牲となった」という英雄物語のレトリックを内破していきたい。

注

- [1] 満蒙開拓平和記念館所蔵映像「安江善子さん語り部の会の講演」2013年11月9日
- [2] 本稿の執筆にあたっては、全国紙の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞のデータベースを利用し、「黒川開拓団」というキーワードで検索を行った。2017年ETVの特集の放送後、朝日新

聞がまず報道した。2018年に新たに「乙女の碑」の説明が追加されたことについては、三社ともが報道している。その中では朝日新聞の報道が一番積極的である。各記事をまとめてみれば、「性接待」、「性の接待」などの用語が頻繁に使われているのがわかる。2019年にテレビ朝日が作成した「史実を刻む～語り継ぐ“戦争と性暴力”」というドキュメンタリーは「アメリカ国際フィルム・ビデオ祭」(USIFVF)ドキュメンタリー・歴史部門で銀賞を受賞している。英語の説明文の中では、当事者女性は「sexual entertainment」と表現されている。本稿で指摘しておきたいのは、以上の用語はあくまでもマス・メディアの言葉であり、当事者女性の言葉ではないということである。

(http://filmfestawards.com/awards/index.asp?PROCESS=Y&F_ENTRY_YEAR=2020&F_AWARD=&F_TITLE01=&F_CATEGORY01=DOCUMENTARY%3A+History&F_KEYWORDS=&F_MATCH_TYPE=OR&submit1=Submit 最終閲覧日：2020年7月20日)

- [3] 「ソ連兵に性接待、帰国後はいわれなき差別…満蒙開拓団の女性たちが語り始めた悲劇」(<https://times.abema.tv/news-article/5880991> 最終閲覧日：2020年9月20日)を参照されたい。
- [4] 上野千鶴子、2018、「戦争と性暴力の比較史の視座」、上野千鶴子他編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』、岩波書店、1-31
- [5] 黒川開拓団および岐阜県開拓団の歴史については、『白川町誌』(白川町誌編纂委員会編1968)、『岐阜県満洲開拓史(第一分冊)』(岐阜県開拓自興会編1977)、『陶頼昭を訪ねて』(旧黒川開拓団 白川町農業友好訪中団1981)、『岐阜県拓友協会の記録』(岐阜県拓友協会2004)、『告白 岐阜・黒川満蒙開拓団73年の記録』(川恵実2020)を参照されたい。
- [6] 2012年に岐阜県内で唯一残っている開拓団遺族会「旧満州黒川開拓分村遺族会」の会長(四代目)になった。父の三郎は初代会長であったという(『中日新聞』2012年6月22日朝刊3面より)。2013年、岐阜県白川町議員選挙で初当選し(<https://go2senkyo.com/local/senkyo/11348> 最終閲覧日：2020年7月20日)、2017年に再選される(<https://go2senkyo.com/local/senkyo/16399> 最終閲覧日：2020年7月20日)。現在は当事者および関係者とともに積極的に証言活動を行っている。
- [7] 猪股祐介、2018、「語り出した性暴力被害者－満洲引揚者女性の犠牲者言説を読み解く」、野千鶴子他編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』、岩波書店、171-198
- [8] 川恵実、2020、『告白 岐阜・黒川満蒙開拓団73年の記録』、かもがわ出版
- [9] [3]に同じ
- [10] 古久保さくら、1999、「満洲における日本人女性の経験-犠牲者性の構築」『女性史学』(9)、1-14
- [11] Mariko Tamanoi, 2008, *Memory Maps: The State and Manchuria in Postwar Japan*, University of Hawaii Press
- [12] [7]に同じ
- [13] 松田澄子、2018、「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』(45)、21-35
- [14] 山本めゆ、2015a、「生存者の帰還－ジェンダー化された〈境界〉－」『ジェンダー研究』(17)、68-91
- [15] モッセ、ジョージ・L、(宮武実知子訳)、2002、『英霊－創られた世界大戦の記憶』、柏書房(=George L. Mosse, 1991, *Fallen Soldiers: Reshaping the Memory of the World Wars*, Oxford University Press)
- [16] 坂部晶子、2007、「慰霊というコメモレイションと当事者の語りのあいだ－開拓団の逃避行の記憶をめぐって」『北東アジア』(13)、99-121
- [17] [7]に同じ
- [18] [8]に同じ 143
- [19] 松田澄子・村瀬桃子、2019、「旧満州からの帰国女性の聞き取り調査」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』(46)、173-195
- [20] 平井美帆、2017、「ソ連兵の「性接待」を命じられた乙女たちの、70年後の告白」(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/52608> 最終閲覧日：2020年7月30日)

- [21] [8]に同じ 「乙女の曲」原文 143
- [22] [8]に同じ 除幕式で藤井会長による挨拶 283－284
- [23] [15]に同じ 12
- [24] [8]に同じ 90－91
- [25] [8]に同じ 150－151
- [26] [8]に同じ 225 曾我久夫、1965、『手記 中華人民共和国東三省乃三年間』